CHRONO　FRAGMENT

コーユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＲＯＮＯ　ＦＲＡＧＭＥＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ１７３６Ａ

【作者名】
コーユー

【あらすじ】
ＡＤ２０００年、建国２０００年を祝って催しされた１０００年ぶりの「千年祭」そこで、再び時の歯車が回りだす・・・

序章・時の翼を持つ者達（前書き）

序章・時の翼を持つ者達

ＡＤ１９９９世界崩壊・・・
突如地底から現れた謎の生命体により世界は瞬く間に秩序を失い世界は混沌の時代を迎えた。

「こんな・・・こんなのってないよ！！」
金髪の髪を後ろで纏めた少女が叫んだ。
その横には紫色のおかっぱの少女と、燃えるような赤い色の髪の毛をつんつんに逆立てた少年がいた。
彼らが今いるのはＡＤ２３００年・・・
世界崩壊からさらに時が進んだ時代。
かつて豊かだった緑は失われ、人々は「ドーム」と呼ばれる居住空間でひっそりと暮らしていた。
「希望」という言葉を忘れ、ただ一日一日を空腹と機械に襲われるかもしれない恐怖に怯えながら・・・

ドームの外には生物の突然変異体「ミュータント」が徘徊し、人間を助けるために生まれたはずの機械が人間を襲っていた。

何のために生きるのか、なぜ自分はこのような時代に生まれたのか。

そして、なぜ自分は死なないで生きているのか・・・
その答えを教えてくれるものなどいるはずも無く、彼らはただ無感動にその日を生き、明日を迎えていた。

人が生きていくには、絶望しかない。

「そうだ、変えちゃおうよ！！」
金髪の少女が突然二人のほうを向いていた。
後ろではいまだに「世界崩壊」の映像が流れている。
二人は驚いたように少女を見つめる。
「クロノが私を助けてくれたように、この未来を変えよう！！」少年のほうは一瞬目を見開き驚いた様子を見せたが、少し微笑み頷いた。
もう一人の少女のほうも「やれやれ」といった感じで苦笑している。
「歴史を変える」それがどのようなことだか金髪の少女は分かっていたのだろうか？
クロノと呼ばれた少年はもう一人の少女と画面を見つめている。
「ラ・・・ヴォス」紫の髪の少女は、画面に映し出された文字を読み取る。
「ルッカ？」
金髪の少女が首をかしげる。

ぶつん・・・・

突然巨大な画面に映し出されていた映像が途切れた。
驚いて画面のほうに向き直る少女。
画面には何も映らずにノイズが走っていた。

「そうね・・・変えましょう！こんな未来ごめんだわ！！」

ルッカと呼ばれた少女は大きく頷いた。
金髪の少女・・・マールは目を大きく輝かせて体全体で喜びを表すかのように飛び跳ねていた。

彼女の胸の上で動きにあわせて跳ねるペンダント・・・・
彼女の母親の形見だといっていた・・・・
それが青白く輝くと、三人の近くに丸い球体のようなものが現れた。

驚き、喜ぶ三人。
すぐにその球体にルッカが近づき、杖のようなものをその上にかざす。
すると、球体は突然巨大になり三人を包み込めるほどの大きさになった。
「いきましょう」
マールが言った。
「マッテクダサイ・・・」
人間では発生不可能な音で、三人は呼び止められた。
声の主は「ロボ」と呼ばれる機械だった。

黄銅のボディーに人間でいうところの「目」の位置にセンサーがつき、二本の足で歩行する。
「自立型人型ロボット」・・・これも未来の世界の産物である・・・・が、呼び止めた。
「私モイッテイイデショウカ？」人間でいうところの「恐る恐る」といった感じで聞いてくる。

「もちろん」マールは間髪いれずに答えた。

そして三人と一体は、球体の中に入り次の時代を目指した・・・・

果てしなく遠い未来から、失われた文明に出会い、伝説と言われた者に出会い、戦い、助け合い・・・

ＡＤ１０００年に始まった少年と少女たちの出会いはいくつもの時を駆けて、自分たちのためではなく、名も知らない人々のために世界を変える旅に出る・・・

彼らにはそんな責任は無い。
義務も無い。
義理など無い。
理由も大したこと無かったかもしれない。
それでも彼らは他人のために文字通り命をかけて戦った。

泣き、笑い、怒り、驚き、喜び、打ちひしがれて呆然とするときもあった。
それでも止まらない。
彼らには翼があった。

「時を駆ける翼」が・・・・

砂ぼこりを上げる荒野の上にひっそりと佇むドーム。
そこは食料も底を尽き、なけなしの食料を機械が守る倉庫から何とかして手に入れようとしていたことがあった。
結局食料は全部腐っており少年たちが機械を打ち倒したときは食べられるものは何も無かった。

彼らが持ち出したのは一掴みの種子。
この時代ではまずお目にかかれないものだった。

「これしかなかったの・・・」少女は泣きそうになりながらその種を老人に渡した。
老人はなぜこの娘が泣くのか分からなかった。
傷だらけになり埃まみれになっているのに・・・

「何ができるかわからない・・・だけど育ててみてください」

そう言って彼らはドームを後にした。

「がんばって!!」金髪の少女が言っていた。

老人もこの荒れ果てた世界しか知らなかった。
かつて栄華を極めた国があったなどとは思いもしなかったことだろう。

「がんばって!・・・・か」

しわがれた声で少女の言葉を反芻する。

何故かこの食料が無い状態でも絶望しないのはなぜだろうか？

『がんばって』彼は生まれてこの方聞いたことも無い言葉だった。

それでも意味は何となくわかる気がした。

「なぜだろうな・・・明日が楽しみに思えてくるとは・・・」

老人も、そのドームに住んでいる人々もその気持ちの正体だけは知っていた。

名前はわからないが、誰しもが一度は持つ事のできる。

その名は・・・・・

「希望」

序章・時の翼を持つ者達（後書き）

クロノトリガーでの未来のワンシーンです。
シリーズを知らない人にも楽しんでもらえるようにしていきたいと思います。

第一話　旅立ちは夢見る千年祭！！（前書き）

クロノクロスの歴史とは大きく違います。
無視しているというわけではないです。

第一話　旅立ちは夢見る千年祭！！

ＡＤ２０００年・・・
青空に太陽が昇り、海は青く澄み魚も泳いでいる。
町は喧騒で賑わい、人々は笑顔で挨拶をする。
ガルディア建国１０００年を記念した「千年祭」から再び千年を迎えた今年、国王は再び「千年祭」を執り行うことを今年の初めに宣言した。
会場は千年前と同じ「マールディアの鐘」のあるリーネ広場。
そこを舞台に飲めや踊れやのお祭りが開催されるとあって、大人から子供まで老若男女問わず人々は準備に精を出した。

あるものは芸術品を。
あるものはその日のために鍛えた芸を。
一日一日を笑顔で過ごしていった。

そして千年祭当日・・・・

ぱぁん！ぱぁん！！ぱぁぁぁぁぁん・・・・！！

大きな花火の音は、ガルディア王国一番の町トルースの町の人々をたたき起こした。
おのおの家から出てきた人々はリーネ広場を目指す。

ぱぁん！ぱぁん！ぱぁん・・・・・！

次々と打ち鳴らされる祭りの音に祭りの準備に追われて、ぐっすり寝ていた人々も起き始めた。

・・・唯一人の例外を除いて・・・

春の日の暖かな日差しの差し込む部屋のベッドで、気持ちよさそうに眠る少年・・・

彼だけは花火の弾ける音に目を開けることができずに未だに夢の世界の中にいた。

その横では箒をもった女性が立っていた。

彼女の名は「ジィナ」この少年の母親である。

「おきなさい！」彼女は今日何度目かの言葉を放つ。

目は険しく釣りあがり、緑色の髪で見えないがもしかしたら血管も浮き出ていたかもしれない。

それほど、彼女はなんども少年を起こしていたのだ。

なんども何度も今のように声を張り上げて。

ぴくりともしない少年。

業を煮やした彼女はついに持っていた箒を両手で掴み振りかぶった。

ぱぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！

今日一番激しい音の花火が晴天の空で弾ける。

「ん・・・・・？」

やっと目を覚ました少年の視界をジィナの放った全力の一撃を乗せた箒が覆った。

「あ・・・・・」

急に少年が動いたため狙いははずれ、箒の硬い竹でできた部分が見事にクリティカルヒットした。

バコン！！

竹の部分は見事に折られ、破片が散った。

突然の出来事を理解する暇も与えられず、ただただ額を押さえ声にならない悲鳴をあげてベットの上をのた打ち回る。

予想外の出来事にすっかり怒りがさめてしまったジィナは、申し訳ないと思いながらも息子に声をかけた。

「おはよう・・・」

涙目で講義をしようとする少年は母親の持っている変わり果てた箒を見て、ぼそりと母親に返事をした。

「どうせ、昨日は興奮して寝付けなかったんでしょう？」

―悔しいが図星だ。

「こんなお祭りそうそう無いんだから今日は楽しんでいらっしゃい」

少年ははっとしたような顔をして壁掛け時計を見た。

時刻は午前１０時。

一瞬彼は背中に冷たいものを感じてベッドから飛び降りて、着替え

を始めた。
その様子を見てジィナは、箒の破片を持ってしたの階に降りていった。
少年は今だひりひりする額を抑えつつ階段を下りた。
「ああ、そういえば」
階段を下りきって、玄関のドアに手を掛けたところでジィナが声をかけた。
「あの子がきていたわよ…えぇと、何ていったかしら…幼なじみの…やだ、思い出せない…歳かしらね？」
キッチンに向かっていた体を向けて、オタマで額の辺りを突いている。
「ティスだろ？」
「あぁ、そうティスちゃん！！—約束してたんでしょ？何か見せたいものがあるって」
幼馴染の少女はこの千年祭にむけて、何か催し物をするつもりだったらしく、なんかげつも前から自室に篭りっきりになることが多かった。
その執着ぶりはものすごく、学校の授業をサボるほどだ。
「平気平気、それは午後からだからまだ時間があるはず」
「そぉ？それならいいけど・・・」
そう言って再びキッチンに向きを直して「夕飯迄には帰ってくるようにね」という言葉をかけた。

当の本人は聞いているのかどうか、「いってきます！！」と「バタン！！」という音とがほぼ同時に聞こえた。

目指すは千年祭の主会場「リーネ広場」。

第一話　旅立ちは夢見る千年祭！！（後書き）

気づいた方もいると思いますが、イロイロもじった名前とかそういう感じのを出していくと思います。
ジィナ→ジナ（クロノトリガーの主人公の母親）ナド

第二話　旅立ちは夢見る千年祭！！２（前書き）

ほんと、

小説に評価をいただきありがとうございます。
やる気につながるので有り難いかぎりです。

第二話　旅立ちは夢見る千年祭！！2

リーネ広場……そこは千年前の祭りのときも会場になり飲めや歌えやの大騒ぎになっていたらしい。
そして、その広場の中央に位置する王女の名前を取った「マールディアの鐘」
「マールの鐘」として親しまれているそれは、ひとつのジンクスを持っている。

曰く、マールディアの鐘に祝福された者は恵まれた仲間と出会うことができる……と。

千年前の千年祭の時に取り付けられたそれは、当時は風に吹かれてその歌声を披露していたという。
今では全体的に老朽化が進み歌声を上げるどころか、時々不吉なうめき声をあげている。
それでも、この国の人々はマールの鐘を大切に大切に見守っている。
そして今回の千年祭も彼女は広場の中央から皆を見守っている。

「うーーん……」
人で賑わう広場はいつものゆったりとした雰囲気よりもこの広場にあってる気がする。
威勢のいい店主の声。
どこからともなく聞こえてくる拍手喝采や、こどもの笑い声。
そのどれもが、いつもの広場にはない新鮮な空気を作り出していた。

「おう！！ジィナさんとこの坊主！！どうだ、いっぱい飲んでいくか！？」
怒鳴り声ともつかない威勢の良い声に振り返ると顔を真っ赤にした男がいた。
「うっわ店長！？」
ついつい、いつもと人相が違うので声を上げてしまった。
目の前にいるのは顔を真っ赤にしてビール（だと思われる黄色い飲み物）をジョッキに掲げている大男。
「飲め！！っていっても俺未成年なんだけど…」
一応もっともなことを言ってみる。
「ンナこと関係あるクワァ！」と、言いつつ持っていたジョッキを傾けてゴクゴクゴクっと喉を鳴らせて飲んでいる。
さすがはこの町一番の酒豪ダナ。
と感心してしまう。
彼の足元に転がっている男は、おそらく彼に飲み比べを挑んで散っていった人たちだろう。
中には「赤」を通り越して「蒼白」になっている人もいる。
（ご愁傷様……）
そんな人々に心の中で黙祷をささげて、その場をさっさと立ち去ることにした。

「はぁ、やっぱでっかいなぁ…」
広場の中央にあるマールの鐘。
そこだけくりぬかれたかのように喧騒が遠くに聞こえる。
約千年以上前には「リーネの鐘」がここに吊るされていたという。

それも、もう古い古い文献などにしかのっていいない。
歴史の一コマになっている。

「ん……」
鼻の中を何かが流れてきた。
「んんん？」
勢い良く流れていくそれをふき取る。
「――――ゲッ」
先の一撃が効いているのだろうか、鼻血が勢い良く流れ出していた。
今朝の一撃を思い起こしてため息をつく。
確かにあの勢いじゃ何もないってほうがおかしい。
そう考えるうちにもどんどん溢れてくる。

「うわ、どうするか・・・」
目の前にあるのは、大きな鐘。
その下には、気持ち良さそうな芝生。
「……」
ちょっと悩む。
「別に立ち入り禁止ってわけじゃないしね」
一人言い訳を吐いて鐘の下に寝そべる。
気持ちよい風が頬をなで、芝生が風に煽られて踊る。
季節はもう春。
「ん・・・・このまま寝るってのも悪くないかな」
ごろんと仰向けになると丁度鐘の中が見えた。

「？」
鐘の中に、暗くてよく見えないが、何かが彫ってあった。
何だろう？と思うのも束の間、一気にゆめの世界に飛び込んでいった。

鐘にはこう書かれていた。

ＡＤ１０００年　再開を誓って　クロノ　マール　ルッカ　カエル
ロボ　エイラ

新たな始まり、消えた友を求めて

それがどこだったのかは覚えていない。
ただ、気が付いたら浜辺に座っていた。
――ここは？
寄っては返す波のリズムに合わせてザザッザザッと波の音が聞こえてくる。
「――！――ぇ、――ュ！」
それと一緒に誰かの声が聞こえてくる。
「ねぇ！聞いてる？」
突然鮮明になる六感。
フィルターがかかっていたような感じに聞こえなかったものが、はっきりと聞き取れた。
「まったく！コドモオオトカゲのネックレス作ってくれるっていうから待ってたのに、帰ってきたのはポシュルだけなんて！」
そういって、僕を呼んでいた
「女性」
はポシュルと呼ばれた―イヌ？を見た。
「ポシュルガンバッタでしゅるよ！」
胸を張って言い返す。
「たっ助けてくださいでしゅる～！って言ってたのは誰だったかしら？」
胸を張っていたのが一転、体中で落ち込んでいる様子を表す。
―あぁ、そうだ僕はコドモオオトカゲのウロコを取りにきたんだっけ……
それで、適当に狩ってたら親トカゲが出てきて
そこで気を失ったはずなのだが。
「レナ。」
目の前にいる幼なじみの名を呼ぶ。

「何よ」
強気な目で振り返ってくる。
っと、突然その顔が歪んだ。
「？どうしたの？」
「ど、どうしたのって、あんたこそ、どうしたの？なんで―」
そういって、言葉を止めたのと同時に何かが僕の頬を伝った。
それは簡単に浜辺に落ちて跡を作った。
「帰ってきたのか…」
ぽつりと口から零れた言葉は自分でも意味不明。
どこからどう帰ってきたのだろうか―。
「え？」
もう一回聞き返そうとする彼女に首を振って答える。
「大丈夫なんでもないよ」
―ポシュルをつれて先に帰っていて。
そう伝えようとしたが、彼女はさっさとポシュルをつれて帰る用意をはじめた。
「じゃあ、子供の世話があるから帰るけど、気を付けてね」
ほら、帰るわよ！っと草かげに隠れていたポシュルをよんで、帰っていった。
ザザァッザザァ相変わらず波は寄せては返すの繰り返し。
それは太古の昔からつづいていて、そしてずっと未来まで続いていくのだろう。
「……イタタタ」
塩気を含んだ風が体にできた無数の傷に染みる。
「ッ！うわっ！」
――ドシャッ
突然力なく倒れてしまった。
なんとか体に力を入れるも、ぷるぷると震えるだけで動きそうにない。
「まいったなぁ…」

情けない自分の姿に呆れ返っていたが視界の端に何かが光った。
年代を感じさせるペンダントと…お守りが入ったような袋。
誰だったかの大切なものを、何で僕が―？
倒れたまま、僕は二つを握り締めた。
すっぽりと抜けた夢のような記憶。
だけど、僕は確かにどこかで戦っていた。
無数の傷が物語る。
手にもつオール型の武器
「スワロー」
にも傷が付いている。
ぐっと再び力を込める。
ぷるぷると震えながら体を起こし袋とペンダントを握り締めた。
スワローを逆の手で持ち目をつぶる。
相変わらず波は音を立てて足場の砂をさらっていく。
ふっと目の前の地平線が暗転し、そのまま足場は浮遊かんのようなとらえどころの無い感覚になった。
―僕は
「これ」
を知っている。
今まで何度も経験した。
迷わず僕はその感覚に身を委ねた。

戦いの誘い

「お～いらはつ～よい～♪勝ったらあげ～るよ１５ポイント～♪」
遠くで力強い主旋律にあわせて響く機械音声。
風に運ばれてきたその音は広場の中央まで届いてくる。
「んぁ…？」
頬を撫でる風とすばらしいダミ声に無理矢理眠気をひっぺがされたらしく、物足りないような感触で目を明ける。
ダミ声の主はわかっている。
「ゴンザレス三世」だ。
この千年祭に向けてティスが作った人型ロボットだ。
彼女曰く
「たまたま昔のロボットの設計図を見かけたから作ってみた」なのだそうだが。
素人目に見ても
「どこが？」
と小首をかしげたくなるほど形が違う。
形は違うくせに性能は元々とほとんど一緒なのだから器用なのか・・・

で、そのロボットなのだが、ああいう風に歌って挑戦者を募っているというわけだ。
戦って倒せばこのお祭りで使えるポイントをゲット！！・・・・・
なのだが。
試作機だった「二世」を完膚なきまでに叩き壊したのがお気に召さなかったらしく、三世は凶暴になっているらしいので、見学も控えるつもりだったのだが・・・・

「うるさ過ぎる・・・」
だみ声が届くこと届くこと。
ピンポイントに自分だけ狙っているのかと勘違いしたくなるほど。
耳障りに。
『ハイハーーーーイ！！挑戦者はいないかな！？』
拡声器でハイテンションな声が聞こえて来る。
『勝ったら１５ポイントだよーーーーー！！！』
５０ギルで１０ポイントだから子供にはだいぶ魅力的な数字。
『さぁさぁ、いないかナ！？オーーーーーイ、そこの鉢巻の少年！！』
「ん？」
鉢巻はしてますが・・・・
『そこのそこの！！黒い髪で鉢巻してて』
ふむふむ、黒くて鉢巻してて・・・
ますます俺みたいだなぁ。
『寝癖みたいにツンツンしてる君！！』
というか
俺でしょ、絶対
「遠慮しまーす」という意味で寝転んだまま手をひらひらさせる。
『あらぁ・・・・残念！！』

絶対やりたくない。
そりゃ、ゴンザレス二世はいいストレス発散の相手になったけど、
壊したあとのティスの怒りようが普通ではなかった。まさか、インドア派のティスに足腰立たなくなるまでボコボコに殴られるとは夢にも思わなかった。
『まぁ、ちっちゃい頃から弱虫なあんたなんて大したことないだろうけど』

なんとでも言え。
絶対に戦わないぞ。
『恐がりで、臆病で、一人でトイレにも行けないんだから』
待て。いつから俺の過去の暴露になった？
『懐かしいわ～雷恐いってずっと泣いてたっけね』
『確かアンタ雷が鳴って驚いてモラ…
「わかった！戦います！戦わせていただきます！」
』
いつまでも俺の過去をばらされるわけにはいかない。
一つ年が上なだけあって知らない過去まで暴露されかねない。
『はぁーい！じゃあすぐにきて～！！』
上機嫌に呼んでくる声に内心した打ちをして体を起こす。
ぱらぱらと緑の芝生が服から舞い落ちる。
残った葉を軽く払い、駆け足で会場へ向かう。
―絶対にたたき壊してやる！
頭の中でゴンザレス三世を破壊するイメージを何度も繰り返しながら。

VSゴンザレス三世！

死屍累々。
思わずそんな言葉を当てはめたくなるほどそこは凄惨な状況だった。
ゴンザレス三世にやられたであろう人々がウンウンうなりながら
「救務所」
と書かれたテントの下で治療を受けている。
さすがに致命傷は居ないらしく軽いエレメント治療で済んでいる。
エレメントというのは、早い話が誰でも使える魔法の様なもので、
攻撃や回復はもちろん、はたまたトラップのような物まである。
「あ！やっと来たわね！」
死体（正確には違うが）の山を眺めていた。紫色をした髪を切りそろえた少女が腰に拡声器をぶら下げていた。
その顔は満足そうな笑みで満たされている。
おそらく、自分の作った機械のすばらしさに悦が入っていたのだろう。
「ほら！戦いなさい！私のゴンザレス3世と！！」

意気揚揚と自慢のロボットに攻撃命令をだしている。
「え？武器は？」
今日は千年に一度のお祭りだ。
当然武器なんか持ってきていない。
「なぁ、武器は？」
「エレメントがあるでしょ」
しれっと言われた。
確かにエレメントがあれば武器などに頼らなくてもそれなりに戦うことができる。
ただ、問題があるとすれば。

―エレメント、苦手なんだよなぁ…
誰にでも使えるといっても、やはり魔法に近いのだ。
何もないところに炎をだしたりするのはどうも好きになれなかった。
いや、好き嫌いの話ではなく才能が無いんじゃないか？と思いたくなるほど絶望的に使えない。

「行きなさい！ゴンザレス三世！二世の仇をとるのよ！」

―仇ってなんだ仇って！

ゴンザレスはゆっくりとティスから視線を動かし無機質な光をたたえた目をこちらに向ける。

右腕が緩慢な動きで９０度持ち上がり、丁度肩の高さでぴたりと止まった。

お互いの距離は５メートル前後
当然リーチの外になるのだが。

相手はロボット。
予想外の攻撃があってもおかしくはない。

できれば腕の直線上にはいたくないので、少し体を右にずらす。

―――――ぼふ！

何かが
　　顔のすぐ横の
　　空間を突き抜けた。

音に遅れて風が頬を撫でる。
突き抜けていったのは子供の頭大のナニカ
そのまま勢いでしゃがみこむ。
その上を風が流れた。

顔を向けると先程の腕は手首の辺りから折れて空洞を表していた。
―？
先程と違うのは両腕が上がっていること。
――――ぼふ！！

まだナニカが突き抜けた。
間抜けな余韻を残しながら顔のすぐ横を風を引きつれて走り去っていく。

遅れた風が中途半端に髪を撫で上げる。

「なんだ？今の？」

声に出したくなるほど突然の出来事。

誰に言ったわけではないけど視界の端にティスが満面の笑顔で様子を見守っているのが見えた。
その表情にむっとしながらゴンザレスを中心に円を描きながら動く。
先ほどいた芝生が勢い良く何かによって刈られていく。

職人もびっくりな滑らかさ。

―いいのか、あんなモン人に向けて。

そこらで売っている芝刈り機よりも高性能なそれは次々と芝生を手

ごろな長さに刈り取っていく。
「このッ・・・・調子に乗るなよ・・・」
同じように円を描きながら手持ちのエレメントに意識を集中させる。
先ほどエレメントは魔法のようなものだといったが、正確には「魔法と道具の性質を兼ねたモノ」だ。
店で買うこともできるし、運がよければそこら辺で拾うこともできる。
要するにそこらに落ちてる石と同じようなものなのだ。
ただ、高性能なものほど希少価値が高く、使いこなせるものが限られてくるので自然と高値になってくる。
才能さえあれば、自分専用のエレメントを創り出すことさえできる。
その域に達した者はまさに「魔法使い」である。
普段エレメントは専用の「グリッド」と呼ばれる腕輪やらイアリングやらの装飾品の類に埋め込まれる。
そして、このとき俺が持っていたエレメントはリストバンドに埋め込まれていた。
一般の店で買うことができる下級エレメント。
走りながら指先をゴンザレスの方へと向ける。
そこから複雑に絡み合った一筋の線が流れ出した。
「サンダーーーーーーー！！！！！」
掛け声と共に光の線はゴンザレスに絡みつき、軽い電気ショックを与えた。
―機械なら電撃でぶっ壊れるはず！
と、油断した俺の顔を勢いよく風が殴りつけてきた。
「ぶお！？」
なんとも無いように腕を向けているゴンザレス。
例によって手首が折れてなかは空洞になっている。
―なるほど、さっきの芝刈りはこれか・・・
勢いよく発射された空気の玉がその軌跡にいた芝を刈り取っていたのだ。

吹き飛ばされながら謎が解けたことに少しすっきりしていた。
そして確認。
これにそんな威力は無い。
おそらく芝を刈り取っていたのはかまいたちみたいなものだろう。
たたらを踏み、倒れそうになる体を無理やり起こし目の前の敵を凝視する。
間抜けそうな顔をしたそれはもう一度俺に風の玉を喰らわせようとしていた。
直線状から横跳びに逃げて距離を確保する。
再び意識を集中して下級エレメントを呼び起こす。
指を突きつけて、狙いを定める。
「ウォーーーーターーーーーー！！！！」
指先から水鉄砲のように勢いよく水流が噴出す。
そのままゴンザレスの鉄の腹にぶち当たりあたり一帯を大雨が降ったかのように湿らせる。
「サンダーーーーー！！！」間髪入れずに付き立てたままの指から電撃を迸らせる。
再び軽い電気ショックを起こし、今度はゴンザレスの動きが鈍った。
ボディのつなぎ目から入った水がサンダーの通り道にでもなったんだろう。
煙を噴き上げて間抜けな顔から光が消えた。
―終わったか？
恐々と近づいてみる。
反応なし。
目の前まで近づいて軽く腹を叩いてみる。
コンコンコンコンコン……
まったく動く気配なし。
プス！！
「ヒィ！！」
プシュウウウウウウウ……

空気の抜ける音がして、そのままうんともすんとも言わなくなってしまった。
「あ～あぁ、また負けちゃったかぁ…ザンネン」
途端に後ろから声が発せられた。
声の主はこのポンコツの作成者。
「今度こそいけると思ったのになぁ…」
心底ザンネンそうに紫色の髪をした少女は動かなくなったポンコツを眺めている。
「あんたが、青のエレメント使うとは思わなかったなぁ」
背中の部分に回り手際よくフタを開けて中を見回しながらそうつぶやく。
「まぁ、赤と白と青は一応持ってる…基本ばかりだけど」
「そっか…油断してたわ、てっきり白しかないと思ってた」
カチャカチャと何かをいじりながら、感心したような、納得いか無いような声色で返事が返ってきた。
エレメントにはいくつか属性と呼ばれるものがあって、各色で分けられている。
白、赤、青、黒、緑、黄…等。
白は電撃、赤は炎、青は水…といったように各々使える者が変わってくる。
基本的に誰でも「先天属性」というものが在るらしく、その属性…要するに色のエレメントを使うことが得意になるといわれている…のだが、俺にはどうもどのエレメントも性に合わない気がする。
さっき使った青のエレメント「ウォータ」も、使うものが使えば岩を砕きかねない威力の水流を出せたりするわけなのだが。
「げぇ！！ほとんど逝っちゃってる！！」叫び声にも似た声で現実に引き戻された。
パタンとフタを閉める音がして、ティスが立ち上がった。
「まぁ、良いわ…あなたの勝ちね」
腰に手を当てながら歩み寄ってきて突然右手の手首を掴んで高々と

上げた。
その途端、あたりからワァ！っと歓声と拍手が降り注いだ。
けが人も、看護していたものも、みながみな拍手をしてくれたりしている。
「あ…あははは…」
「イイゾー！！ボウズ！」
「カッコイー！！」
「ヨクヤッターーーー！！」
イロイロな歓声にちょっと戸惑いつつ笑う。
少しひきつっていたかも…
「さて！！もう少ししたら天才発明家の私『ティス・アシュディア』とその父『カバン』の新発明品のお披露目会があるからみんな来てねーーーー！！」
ちゃっかりと、自分の出し物の宣伝なんかしちゃってる。

―やれやれ…
幼馴染を見ながら俺は大きくため息をついた。

もう、これ以上強力なロボットを作られないことを祈って。

平行世界への誘い

「なぁ、考えたこと無いか？」
焚き火のを囲む中、一際体格の小さい者が「ケロロロ…」と喉を鳴らしながら呟いた。
「何を？」金髪の少女はポニーテールを揺らしながら声の主のほうへと向く。頭の動きに少し遅れて尻尾が動いた。
「俺たちは、時代を飛び越えることができる。」
喉を鳴らしながら、白銀の翼を持つ乗り物へと視線を動かす。
「ウン！すごいよね！！そのおかげでみんなにも会えた訳だし！」
元気よくポニーテールの少女は周りを見回す。
一人を除いて各々が皆焚き火を囲んでいた。
「あぁ、そのことは俺もよかったと思ってる…」
「？」
言いよどんだ声の主に少女は首を傾げる。
「あいつを助けることもできたわけだが」
そういって、白銀の乗り物の中で眠る少年を眺めた。
「ヨク眠ってイマス…トテモ疲れていたのデショウ」
人間では発声不可能な音で、誰かが言葉を発した。
「まぁ、ね…まさに死ぬところだったんだからね」
「そう、そこだ」
「？」
全員が小柄なものを見た。
「俺たちは、あいつを『あの時』から連れ出した」
「えぇ、そうね…『時の卵』を使って人形と入れ替えた」
眼鏡に炎を反射させながら続きを促すように答える。
「そうだ。なら、俺たちの目の前で消えたあいつも人形だったんじゃないのか？」
はっ…っと全員が息を呑んだ。

木に寄りかかっていた男が不意に背を起こす。
「貴様はでは、あのときの奴はどこに行ったというのだ…？」
問い詰めるような、敵意の篭った声。
「そこまでは俺もわからんが…」
バツが悪そうに「ケロロ…」と喉を鳴らして答えた。
「…パラレルワールド…」
ぼそりと眼鏡の少女が呟いた。
「パラレルワールド？」
「えぇ…今までどうして気がつかなかったのかしら…」
周りを見回して少女は続ける。
「私たちは何度も時代を飛び越えてきたわよね？」
皆がうなずく。
焚き火がパチっと弾けた。
「私たちは、『私たちに遭遇していない』」
ぽかん…金髪の少女は口をあけた。
「え…っと、どういうこと？」
「たとえば、私たちが現代から中世に向かってすぐに現代に戻るとするでしょ？」
「う・・・ウン」
「そのとき私たちは現代の時間上ではほぼ、数分しか経っていない」
「そうだね…」
「おかしいと思わない？『その数分前に戻ることができない』のよ」
「え…それってどういう意味？」
「つまりだ」寄りかかっていた男が言葉を継いだ。
「私たちは『過去の自分と対峙することができない』のだ。できたとしても私のように干渉は殆どできない」
「え…？」
「そういうこと…それにどういうわけか、未来の自分と会うこともできないしね」
ヤレヤレ…といった感じで肩をすくめる。

「しかし、『あの時』私たちは過去の己と対峙した…奴を生き返らせるという名目でな」
「そう…つまり、『時の卵』と『シルバード』はまったくの別物」
「えっと…つまり？」
金髪の少女は一生懸命理解をしようとしていたが耐え切れずに結論を急かせる。
「あいつは、私たちが生き返らせた正真正銘あいつってこと」
「……」しばし考えてから。
「ウン！そうだよね！私ちょっと様子見てくるね！」
そういってシルバードと呼ばれた白銀の乗り物へと駆け寄っていった。
「……」
「で、実際はどう思ってるんだ？」
「時の卵は、時代を超えるんじゃ無くって多分…」
「次元を超えて隣の世界へ行くもの…か」
「えぇ…未来や過去の自分と対峙してしまったら、これから起こるであろうことがすべて分かってしまう…そして、その未来を回避することは」
「未来、または今の自分を殺すことだ」
「そうね…おそらく第三者の手で行われなければいけないんだと思うわ…だからこの旅には必要最低限の歴史干渉しかできない…」
―パラレルワールド…か。ひとつかもしれないし複数かもしれない…もしかしたらこの旅をせずに千年祭を終えてる自分がいるのかもしれない。カエルの姿に変えられずに生活した青年がいたのかもしれない。最愛の姉をなくすことの無い、幸せな王国の王子がいたのかもしれない。「もしも」の世界…「もしも」の数だけ存在する世界…もしかしたら…ラヴォスの来ない
世界があったのかもしれない…
眼鏡をかけた少女は思案をめぐらせる。

いつ行き着くかもしれない思慮の海を。
証明しようの無い仮説を打ち立てては別の仮説でそれを叩き崩し、再び何かを仮設する。
『時の卵』とは即ち『別の世界』に干渉することのできるアイテムであり、『シルバード』は『時間軸の延長上』を移動することができるモノ。

後に彼女は未完成ながらも、世界を飛び越えるモノを発明することとなる。
そして、それはまた新たな物語を紡ぐ事となる。

猫とペンダント　その１（前書き）

とてもとても久しぶりの更新です。
ファンフィクション手難しいですよね…
今更ですけどｗ

猫とペンダント　その1

ティスの作った殺人マシンを辛くも撃退した俺は再び眠る気も起きずぶらぶらと祭りの景色を楽しんでいた。
走り回る子供、歓声がとどろく広場、迷子になったのだろうかどこからともなく響いてくる泣き声に、怒声とも罵声ともとれない大声。
そのどれもが祭りに欠かせないスパイスであるし、また、祭りを祭りたらしめるために必要な独特の雰囲気を作り出す。

にゃー。

…と、いつの間にか足下にネコが寄り添っていた。
黒いふさふさしてそうなネコだ。
「どした。おまえ迷子か？」
しゃがみ込み目線を落としてネコに話しかける。
黒い毛並みの間に赤い首輪が見えるところでおそらく飼い猫なのだろう。
名前は「アルフレッド」というらしい。
「ん～なかなかいい名前してんなぁ、お前」
ひょいとネコを抱え上げてみる。
独特の毛の感触と、柔らかさが指に伝わる。
知らない人に抱かれるのはなれているのか、アルフレッドは逃げるそぶりをせずに寧ろされるがままになっている。
それをそのまま胸に抱く。

ごろごろごろごろ…

気持ちよさそうに喉から音を鳴らしてアルフレッドは眼を閉じてしまった。
「のんきなやつだ」しらず溜息とともに漏れる。
見知らぬ人間に抱かれてるのに安心してしまったのだろうかぴくりともせずに丸まっている。
「かわいいネコですね！」
突然の声にびくりと体を震わせる。
それが伝わってしまったのかアルフレッドも一瞬で覚醒して辺りの様子をうかがっている。
…無論俺の腕の中での話だが。
「あ、ごめんなさい…」
声の主は少し声を小さくして申し訳なさそうにしている。
身長は俺よりも少し低い程度で、短く切った金髪を片方だけ結っている。
「こっちも気がつかなくって、すいませんでした」
何でだろう、相手に下手に出られるとこっちも下手に出てしまう。
不思議なものだ。
アルフレッドは身の危険を感じなくなったためか、また微睡んでいるようだ。
「その子気持ちよさそうだね」
丸くなっているそいつを女の子はゆっくりと見つめている。
「のんきなもんでしょ…見ず知らずの人間だってのに」
途端、ネコをみていた女の子は突然俺の顔をのぞき込んだ。
「え？」と顔に書いてあるような気がする…。
「この子、あなたのネコじゃないの？こんなに気持ちよさそうに寝てるのに？」
「今さっき、そこで足によってきたところ」
正直に話す。

まぁ、隠すほどのことでもないしコイツを盗むつもりだったら嘘をつくのだろうけど、俺にはそんな気は毛頭ない。
それに嘘は下手だと自分でも知っている。
「動物に好かれるんだね」
再び顔をアルフレッドに向けて溜息をつくように、感心したかのように。
「こいつが人なつっこいだけだと思うけど」
抱いてみる？と腕を差しだそうとすると女の子は一瞬身を引いてしまった。
「エ！？ほ、ホント！？ねぇ！？いいの！？」
予想以上の驚き、いや、これは感激？
うなずきながら俺はゆっくりと腕の中のモノを女の子に渡す。
薄目を開けて辺りを観察し状況を理解しようとしているのだろうか、少し顔を動かしている。
しばらくしてその顔が一点で止まった。
「かわいいねぇ～」
のほほんときっと笑顔なんだろう…で腕の中のアルフレッドを見つめる彼女の胸の上で揺らめく小さなペンダント。
それにアルフレッドは釘付けになってしまっていた。
やはり、ネコらしいといえばいいのだろうか？
動くモノには眼がないご様子で。
育ちの良さそうな毛並みと名前をしていてもそこは変えようがないのだろうか？
ゆ～らゆ～らと彼（彼女？確認忘れてた）を挑発するペンダントは見方によっては時計の振り子のようにも見える。
チック、タック、チック、タック…
右、　左、　右、　左
ピクッピクッとアルフレッド（名前からするにオスか）はいつの間にか獲物を見つめるような眼でペンダントを見つめている。
…やばいような気がする…

そう思った瞬間女の子の悲鳴が聞こえ、アルフレッドは神速の右を（ネコパンチ）繰り出していた。
驚いて手を離してしまった女の子からまんまと抜け出したそいつはそのまま走り去っていってしまった。
「…」
「…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1736a/

CHRONO　FRAGMENT

2010年10月11日08時09分発行